

上条 報告

第45号
平成25年2月

甲州市教育委員会
☎32-5097

甘草屋敷の

「甘草」を活かした 新たな取り組みについて

塩山駅北口正面に所在する重要文化財旧高野家住宅は、江戸時代の中頃、享保五年（一七二〇）から薬用植物の甘草を栽培し、幕府に納めていたことから、「甘草屋敷」と呼ばれています。

甘草はもともと国内に自生していた植物ではなく、当時は大変貴重なものだったと思われる、高野家に伝わる「甲州甘草文書（県指定文化財）」には、幕府御用となった経緯や栽培方法、芽の本数などが記されています。

甘草は現在、ほぼ全てを中国などからの輸入に頼っていますが、近年国産化の試みが進められています。国産化にあたり優良な種苗の選別が行われていますが、その中に甘草屋敷の甘草も入っています。

一月十六日に、甘草屋敷由来の甘草の増殖を手がけている「新日本製薬 岩国本郷研究所」を訪ね市長以下四名で視察してきました。



新日本製薬岩国本郷研究所で育てられている、甘草屋敷由来の甘草のクローン株。

甘草の現状

甘草は漢方薬の原料で根と根茎（ストロン）に含まれる「グリチルリチン」を用います。この成分が大変甘いため、甘草の名があります。日本では漢方薬以外に、この甘さを使って食品の甘味料として多用されています。ご家庭にあるスナック菓子の原材料をご覧ください。「甘味料」に「甘草」「カンゾウ」と記載されているものがあると思います。また、味噌や醤油の醸造にも使われていますので、日本人なら意識しなくても毎日口に入っているものです。



甘草屋敷の甘草は、国内に植えられている中でも古い歴史をもつものです。

とが分ります。ただ、栽培をしているわけではなく、どこからか根分けしてもらい植えておいた、という感じだったと思われるます。

根分けの大元は、例えば高野家のよ

うな甘草栽培を命じられた屋敷だとは限りません。東新居村の屋敷は甘草栽培の記録がないからです。江戸時代には、甘草という薬用植物と知らずに庭先に植えていた宅があちこちにあったのかもしれませんが。

甘草屋敷の甘草は、薬種として植物そのものが江戸へ持ち去られています。大半は幕府が管理する薬園に植えられるのでしたが、さらに他の地へ移された株もあります。奈良県宇陀市に「森野旧薬園」という、江戸時代に個人が整備した薬園がありますが、かつては甘草が植えられており、その株は幕府の役人から報奨として与えられたとの記録がありますので、甲州産の甘草が渡ったものと思われる（「上条報告第二十六号（平成二十三年七月）」参照）。

甘草屋敷の甘草



甘草屋敷で甘草の栽培を命じられたのは、享保五年（一七二〇）のことです。「甲州甘草文書」によると、享保より六〇七〇年前に、東新居村（現笛吹市一宮町）から根分けしてもらったとあります。

その当時幕府に甘草を上納していたのは高野家だけでなく、下石森村・下神内川村（いずれも現山梨市）にも甘草屋敷と呼べる宅がありました。また、塩山下柚木の個人宅にも甘草に関する古文書が残されていることから、割と多くの屋敷に植えられていたこ



甘草屋敷内の甘草。よく茂っているようにみえますが、花を咲かせず実も付けません。古文書にも「花実を付けない」とありますので、昔からそういう性質なのでしょう。そのためか、同じ品種（ウラルカンゾウ）と比較すると、葉が平坦で色も薄く、茎もそんなに高く成長しません。



甲州甘草文書（県指定文化財）。江戸時代の甘草栽培に関する稀有の資料です。

甘草国産化の取り組み



塩山市（当時）が甘草屋敷の公有化と整備を始めた平成六年に、国内では研究者の間で甘草の不足が心配され始め、最終的な目標を国産化に定めた議論が出され、徐々に研究が盛んになってきました。

甘草は、漢方処方方の七割（二二〇品目中一五〇品目）に含まれており、甘草の不足は多くの漢方薬の供給停止に直結してしまいます。そのため研究者や製薬会社を中心に、いろいろな栽培方法が検討され、また、栽培する甘草の苗についても、より多くの薬用成分が抽出できるよう、優良な品種の選抜や育成が進められました。

甘草屋敷の甘草も、優良品種の一つとして武田薬品工業でクローン株が作られました。

「甘草に関するシンポジウム」開催



こうした背景の中、甘草についての研究が急速に進み、平成十三年七月には「甘草に関するシンポジウム」が塩山市で開催されました。シンポジウムは、実行委員会代表で甘草研究の第一人者である草野源次郎氏が主催し、甘草屋敷整備事業の完了記念としての位置づけでした。

草野先生は、平成六年からたびたび甘草屋敷を訪れ、甘草の様子を見ていただいていたいました。

このときのシンポジウムでは、甘草の成分分析の結果や、中国以外（オーストラリア・モンゴルなど）での栽培の様子などが報告されました。

その後シンポジウムは、二年に一度開催されており、本年七月に第七回目が北海道で開催されます。

国産化の成功



研究者や製薬会社を取り組んだ結果、薬用成分を多く含んだ栽培方法がいくつか見出され、実際に圃場での栽培が始められました。

その一つが塩ビ管を使った筒栽培で、長さ一メートル弱の塩ビ管に苗を植え、まっすぐな太い根を育てるというもので、一足早く栽培に成功したのが、福岡市に本社がある新日本製薬株式会社でした。新日本製薬では、熊本県合志市や新潟県胎内市などで、協定を締結した後に栽培を委託しており、栽培に関するノウハウを持っていきます。

甲州市での取り組み



甲州市では、平成二十四年度から新日本製薬と連絡を取り合い、市内での栽培の可能性と、その際の協力体制などを検討してきました。



筒栽培について研究所の吉岡所長より説明を受ける田辺市長。



岩国本郷研究所は、山口県岩国市の山中にあります。新日本製薬の甘草栽培の中心施設で、施設内では数万本の甘草苗が作られています。

栽培の目的として、遊休農地の対策や甘草を使用した食品その他の製品化を行い、産業化を図ることが挙げられますが、もっとも大きな目的は、甘草栽培発祥の地である甘草屋敷が所在する甲州市として、甘草を栽培することの意義を広くアピールし、市の発展の一助とすることです。

先行して栽培を行っている合志市や胎内市でも、甘草の「聖地」ともいうべき甲州市との交流を希望しています。将来は、他の栽培自治体とも連絡を取り合いながら、甘草栽培発祥の地として情報発信をしていく計画です。

二月十五日には、新日本製薬社長や関係者が来訪して、甲州市役所で栽培に関する協定の調印式が行われます。江戸時代に始まり、明治時代に消えた当地の甘草栽培が、再びよみがえることとなります。



無菌室で研究者からクローン苗について説明を受ける市長。



クローン苗。細いですが2年もすると太い根が収穫できます。



本年度収穫された甘草の根。国産として化粧品や食品に使われます。



地元・山口放送の取材があり、その日のうちに報道されました。